



## 科学ジャーナリストの忠誠心

保坂直紀

今年の7月末に同僚たちが開いてくれた送別会で、S君が「保坂さんほど会社に忠誠心のない人はいない」というお言葉をくれた。彼だって会社に忠誠心があるようにはみえないし、まあアルコールの入った席でのこと、お互いさまだと思ってその場は聞き流したが、いまになってこの言葉が妙に気になる。

定年まで5年あまりを残して、読売新聞社を辞めた。在職した28年のほとんどを科学部ですごした。「男はつらいよ」の寅さんではないが、思い返せば恥ずかしきことの数々。大小さまざまな失敗を繰り返しながらもやってこられたのは、同僚たちのおかげだ。よい会社だったと思う。でも、たしかに忠誠心はなかったな……。

新聞社は組織で動く。だから、たとえば原発事故の記者会見がたてつけにあっても、そこに複数の記者をやりつけ、同時に別の記者が裏をとる取材もできる。氾濫する情報のなかから市民にとって価値があるものを選び分け、生の素材を噛み砕きやすいように料理して届ける。このジャーナリズムのイロハを短時間にこなせるのが、組織ジャーナリズムの強みだろう。

一方で、組織ジャーナリズムには特有の弱さもある。何年もおなじテーマを追い続けられる記者は、そう多くはない。社内には異動があるし、記者にいろいろな仕事を平等に経験させるため、しばしば担当替えもある。素粒子物理を取材していた記者が、きょうからは先端医療の記事を書く。なかなか専門性が深まらない。この研究は素晴らしい。これはイマイチ。そんな感触が正確に得られるようになるには時間がかかる。その

手前のところで仕事をせざるをえない。

配置換えで生命科学の担当デスクになるよう命じられたときは、これでほんとうによいのだろうかと思った。ほとんど取材経験のない分野だったからだ。若い記者の原稿を見ても、科学としてのリアリティーを自分の経験に重ねて感じるができない。原稿へのアドバイスにも実感がこもらない。組織の駒なのだから、せいとくはいえない。だが、これでは読者に申し訳ないと思ったあのときの気持ちと自分のふがいなさが、新聞社を辞めるひとつの大きな動機になった。

いま、東京大学海洋アライアンスというところで働いている。海に関係するさまざまな分野の研究者たちが文理を超えて協力し、新しい知を生み出していくための仕組みだ。ここで情報発信の強化に微力を尽くすことになった。組織ジャーナリズムから離れて孤軍奮闘だが、若いころ大学院で取り組んだ海洋物理学の研究や、仕事のかたわら博士論文にまとめた科学報道の研究、そしてもちろんこれまでの記者経験をもとに、どうすれば自分がいちばん世間の役にたてるのかをよく考えながら、伝える情報の質をたかめていきたい。いや、そうしなければいけないのだと己を鼓舞している。あえていえば、それが私の忠誠心か。

科学の伝え手は、なにに対して忠誠心をもつべきなのか。所属する組織、科学のコミュニティー、隣近所の人たち、それとも自分に対して……。そう自問してみるのも、きっとたまにはいいことなのだ。どうもありがとう、S君。

(JASTJ理事、東京大学海洋アライアンス上席主幹研究員)

### CONTENTS

巻頭言	1
報告 スクープアジア東京会合	2
全体報告/スクープアジアが実現するまで	
2日間の東北ツアー/大活躍の学生通訳たち	
裏方の苦労と感謝	
例会報告(9月) 南海トラフ巨大地震	6

例会報告(10月) 地球温暖化の現状をどう理解?	7
会員だより 戦後日本の科学ジャーナリズム史に迫る	8
科学ジャーナリスト塾に参加して	9
理事会報告 JASTJ発足20周年記念事業	10
WEB編集長から	10
事務局だより	12

## アジア太平洋各国のジャーナリストが参加 多彩な講義で充実の5日間

スクープ (SjCOOP) アジア東京会合2013は11月18日 (月) から22日 (金) まで5日間、東京・六本木の政策研究大学院大学 (GRIPS、白石隆学長) を主会場に開かれた。笹川平和財団 (SPF) の助成、GRIPSの協力を得て実現した。参加者はインドネシア、ベトナム、カンボジア、フィリピン、カナダ、オーストラリア各国のジャーナリストら計18人。JASTJ側スタッフや、2015年の第9回科学ジャーナリスト世界会議開催国の韓国科学ジャーナリスト協会 (KSJA) の関係者5人も加わり、延べ40人が参加した。

18日は実務者会合の形となり、指導役ジャーナリスト (メンター) が集まって世界ジャーナリスト連盟 (WFSJ) のスクープアジアプロジェクトマネジャーのユン・キムさんの司会で、プロジェクトの進め方や今後の課題などが話し合われた。

### ● 各国の科学報道事情も報告

開会式は19日午前9時から行われ、有本建男GRIPS教授、深井克純SPF室長、小出重幸JASTJ会長のあいさつの後、ジャンマーク・フルリー WFSJ顧問がスクープの目標などを語り、参加者全員の円卓会議「各国の科学報道事情報告」が開かれた。また経済産業省の谷みどり消費者政策研究官が、日本の公害報道の歴史をたどりながら科学報道の重要性を講演した。

午後からは、牧野賢治JASTJ元会長が日本の科学ジャーナリズムの歴史と現状についてレクチャー。続いて朝日新聞の英語WEBサイト「AJW」の城俊



東京会場では科学報道をめぐる活発な質疑も

(撮影 館野佐保)



開会式で挨拶をする小出JASTJ会長

(撮影 館野佐保)

雄編集長や科学医療部の西川迅記者ら4人が日頃の苦労や読者の反応などについて説明し、参加者との活発な質疑が続いた。同日夕は、会場近くの中華店でウェルカム・ディナーが開かれ、38人が参加、武部俊一JASTJ前会長が歓迎の挨拶をした。

20~21日両日は、参加者全員による東北ツアー。

最終日22日は、韓国のジェオク・シムKSJA代表やチュン・キムWFSJ会長ら5人もセッションに参加し、ソウル大会の準備状況、韓国の科学ジャーナリズムの実情などを伝えた。また、JASTJの引野肇事務局長が今後のアジアでの連帯強化のために何をすべきかを語り、高橋真理子副会長がJASTJの歴史と課題を



参加者が集まって記念撮影

(撮影 館野佐保)

報告。各国で協会をどのように組織し活動を広げていくか、率直な討論が繰り広げられた。

### ◎最終日は乾杯で成功祝う

最後のセッションは角南篤GRIPS准教授と有本教授が、科学政策と報道についてレクチャーし、ジャーナリズムと科学政策の距離感、協力体制などについて大局的視点から提案した。その後のフェアウェル・パーティは、参加者が宿舎としていたホテル・

アジア会館で開かれた。立食式の晩餐には、日本側プロジェクト立ち上げを支援した大戸範雄・武田計測先端知財団専務理事も姿を見せ、東京会合の成功を祝ってくれた。

一方、22日午前中には朝日新聞社見学ツアーが組まれ、メンターとは違う立場で東京会合に参加した各国の大手紙幹部らが、勝田敏彦メディアラボ室長補佐らの案内で編集局や新聞製作システムを見て回った。  
(JASTJ会長 小出重幸)

## スクープアジアが実現するまで

SjCOOP (スクープ: Science journalism COOPeration) プロジェクトは、先進国の科学ジャーナリストが途上国の科学ジャーナリストの育成に手を貸すという、科学ジャーナリスト同士の「助け合い」を基調とした世界科学ジャーナリスト連盟(WFSJ)の事業である。

### 連盟誕生と同時に企画スタート

2002年のブラジル会議で設立が決まった世界連盟が、実質的な活動を始めたのは04年のモンテリオール会議の後からだ。まず「幽霊を捕まえようとした科学者たち」(文春文庫)などの著作で日本でも知られる米国のデボラ・ブラム氏らが中心となり、活動計画書をまとめた。これを手にジャンマーク・フルリー事務局長(当時)が欧州各地を訪問し、民間財団や政府系の援助機関に資金提供を依頼して回った。

こうして、カナダの国際開発研究センター(IDRC)だけでなく、英国の国際開発省(DFID)、スウェーデン国際開発機構(SIDA)から巨額(と当時の私には思えた)の資金を得ることに成功、あれよあれよという間にこの野心的な事業が始まった。当時、私は世界連盟の理事を務めていたが、私以外の主要メンバーの企画力、行動力、調整能力に圧倒されるばかりだった。

アフリカ中東地域を対象に3年間のプロジェクトが始まり、最初のメンター育成合宿(5日間)が06年夏にミュンヘンで開かれたユーロサイエンス・オープン・フォーラム(ESOF)に合わせて実施された。ミュンヘンに招いた15人に対し、経験豊かな欧州の科学ジャーナリストがコーディネーターとなって実地訓練をする。こうしてスキルアップした15人が今度は自分たちの国や地域で科学ジャーナリストを育てる、という仕組みだ。自国に帰っても、ウェブベースでコーディネーターとは頻繁にやり取りでき、

国内会合や地域会合が何回か組み込まれている。エジプトの女性科学ジャーナリスト、ナディア・エラワディさんがプログラム責任者を務め、ミュンヘンで開かれた世界連盟理事会の席で彼女が「良いスタートが切れた」と誇らしく報告した様子は今も鮮明に覚えている。

プロジェクトは大きな成果を収め、10年には第2期が始まった。そのころ「次はアジアで」と相談を受けた。だが、私は「アジアでは難しい」と言うしかなかった。アフリカ諸国は、旧宗主国の言葉が共通語として使われている。中東はけんかが絶えないものの、アラビア語が共通語である。共通語のある地域なら「Peer-to-Peer(同僚同士)の教育」もやりようがあるが、国ごとに言葉の違うアジアでは無理ではないか。

### JASTJも資金集めに乗り出す

ところが、フルリー氏から「カナダの援助機関からスクープアジア計画のスタートアップ資金が得られた」という連絡を12年にもらい、観念した。そうとなったら日本が知らん顔するわけにはいかない。何よりもまず、日本からの資金提供が必要である。

こうして、日本の資金援助団体のリサーチ、資金が得られるかどうかわからない段階での事務局体制の整備、世界連盟との頻繁な情報交換が始まった。遠山敦子・元文部科学大臣始め多くの方々に相談した。そのうちの一人、政策研究大学院大学の白石隆学長には「お金は出せないけれど、それ以外のところでは全面的に協力する」という言葉をいただいた。最終的に笹川平和財団に的を絞って助成申請をし、「実績のない団体にいきなり3年計画の支援を決めるのは異例」と言われながら13年春に支援決定をいただき、11月の東京会合の開催にこぎ着けた。

(JASTJ副会長、高橋真理子)

## 2日間の東北ツアー 東日本大震災の被災地も視察

2日間の日程で実施した東北ツアーは、アジアのジャーナリストたちにとって東日本大震災の被災現場を訪ね、当事者に直接インタビューする機会となった。参加者約30人は11月20日午前8時前、大型バスで東京を出発。前東北大学医学部教授の坪野吉孝医師もガイドとして同乗してくれた。東北自動車道経由で宮城県石巻市まで約6時間。富士山も見える快晴の空の下、紅葉の田園地帯を走り抜ける道中は参加者にとって連日の会議とはひと味違う息抜きになったようだ。

### ◎津波のすさまじさ実感

最初の訪問先、宮城県女川町は、リアス地形の「V字型」の湾に面した人口約1万人の漁港。2011年3月11日、津波の高さは海岸線付近でも15m、内陸まで遡上した津波は約30mにまで達し、町全体が全滅の被害にあった。バスは、高台にある女川町地域医療センター



石巻魚市場で須能さんから放射線検出選別装置の説明を聞く  
(撮影 小出重幸)

（旧女川町立病院）に到着、この駐車場からは女川漁港と更地となった町全体が見下ろせる。

女川で合流した毎日新聞塩釜駐在記者

の渡辺豊、愛子夫妻に「病院は標高16mありますが、津波はここで18mに達し、病院一階の天井近くまで水没しました」という説明を聞きながら、参加者はそのすさまじさを体感したようだった。地震、津波の被害からどのように身を守ったのか、復興の進み具合など、地域の最新状況を聞いていた。

続いて石巻市へ。沿道に破損した建物が残されている様子にカメラを向け、瓦礫が撤去され平原となってしまった市街地を見ると、渡辺さんらに説明を求めるなど、現場に接するジャーナリストならではの姿が見られた。

午後3時半に石巻市の石巻漁港に到着。石巻魚市場の須能邦雄社長（70）が、津波でほとんどの施設が押し流され、再建工事が進む魚市場を案内してく

れた。魚市場と東北大学が共同開発した、海産物の放射能自動選別機も見学。須能社長は、風評被害を払拭するためにこのような検査が必要になった事情、それに向けた漁業者の地道な取り組みについて紹介した。

プレハブの仮設事務所で開かれたミーティングでは、震災時や復興資金調達に走り回った須能さんの体験、家族を失った仲間への心配りなどに聴きいった。質問に英語でていねいに答える須能さんの人柄に、「有志の人。彼がいたから復興が進んだのだろう」と、多くのジャーナリストが感銘を受けていた。

### ◎ロボットの研究室を見学

ツアー2日目は、仙台市青葉山の東北大学工学部キャンパスを訪ね、レスキューロボットを研究開発している竹内栄二郎・災害科学国際研究所助教の研究室を見学した。竹内さんは、研究開発のねらいやロボットごとに多様な機能を持たせる工夫などを解説した後、各種ロボットを動かして見せてくれた。ジャーナリストらが「なぜ研究成果をビジネスとして起業しないのか」と質問したのに対し、竹内さんが「我々はビジネスにするよりも、この技術を公開し普及させたいのだ」と答えたのには驚きの表情を見せた。ロボットの利用状況や研究費の質疑では、成果をどう普及させるかという課題も浮き彫りになった。

東北大学片平キャンパスのレストランでの昼食後、帰路に。青葉城の展望台で紅葉と市内から太平洋まで見渡せる景観を満喫し、午後8時に東京に戻った。

(JASTJ学生会員、お茶の水女子大学大学院 鈴木美慧)



東北大学では開発中のロボットを見学

(撮影 舘野佐保)

## 大活躍の学生通訳たち

スコープアジアは2013年9月にハノイで最初のミーティングを開いた。公用語を「英語」としたため、世界連盟事務局からは「通訳に多大な時間を取られた」と連絡を受けた。通訳をどうするかは企画の初期段階から重大問題だったが、世界連盟からのメールで東京会合の成否も通訳グループの努力にかかっていることを改めて痛感した。我々の準備は6月から始まっていた。

プロジェクト事務局を務めてくれたサイテック・コミュニケーションズ代表の由利伸子さんを通して、東京工業大学留学生センターの野原佳代子教授にお願いし、同大学大学院留学生の中から候補者を探してもらうことになった。こうして同大学の留学生、更にその知り合いの慶應大学大学院の留学生にも候補者をつのり、ベトナム、インドネシア各2人、カンボジア1人の計5人が期間中、交代で通訳を務めてくれることになった。

東京会合で、彼らは自国のジャーナリストの近くに座り、耳元で英語を翻訳し、あるいは無線の音声ガイドシステムを利用してイヤホンで数人に伝え

た。一方、参加者の発言を、逐次英語に翻訳するなど、会議進行に重要な働きを担った。

予算の事情で通訳担当者への謝礼は一日2万円の範囲でお願いした。「科学コミュニケーション」を学ぶ学生も多かっただけに、彼らからは「自国の科学ジャーナリストら多くの人たちを知るなど、良い勉強の機会となった」という感想が寄せられた。特に東北ツアーに同行してくれたインドネシアのビンタンさんとフェブリさん、ベトナムのグエンさんとクウィーンさんら4人の通訳には「得がたい体験をさせてもらい、感謝しています」と言われた。これを学びの機会にしてもらえれば、という当方の願いをしっかりと受け止めてくれたようで、うれしかった。

一方、記録係として参加した早稲田大学大学院の下山龍之介さんは、東北ツアーのなかで、日本語—英語の通訳としても活躍、石巻市や東北大学取材の大きな助けになった。

来年9月の拡大東京会合では、更に多くの参加者が集まるため、通訳体制をどうするか、本格的に検討しなければならない。(JASTJ会長 小出重幸)

## 裏方の苦勞と感謝

スコープアジア東京会合は11月22日、フェアウェルパーティーを以て無事に閉会したが、事務局にとっては事業報告書作成という大仕事が待っている。筆者は5月からJASTJ理事に加わると同時に、経済産業省などの受託事業に関わった経験があるという理由だけで本プロジェクトの経理を担当することになり、当惑しながら多くの関係者に支えられて今日に至っている。

このプロジェクトでは、笹川平和財団が科学ジャーナリスト世界連盟と契約し、東京会合実施をJASTJが行う構図になっている。JASTJは今まで、省庁の公募事業などで採択された経験のない任意団体である。公募事業の場合、どんなに提案内容がよくても、受託経験のない団体は普通なら採択されない。笹川平和財団がプロジェクトを採択してくれたのは、勇気ある判断だったと思う。

実際、予算執行について我々にたびたびアドバイスし、9月には東北ツアーを充実させるために大幅

な計画変更も認めてくれた。おかげで会期中に東北ツアーを実施し、現地語⇄英語⇄日本語という複雑な通訳も可能になった。

また、今回は講演や通訳への謝金と海外からの参加者へのPer diemの支払が発生したために、源泉所得税を納めることになった。復興税を加えた税率は、日本人か居住権のある外国人に対して10.21%で、外国人には20.42%。Per diemとはラテン語でPar dayの意味だが、税金の対象がその日の食事代であったために、交渉の末に源泉所得税は発生しないことになった。これらは小石川税務署に一から指導してもらった。また、実務をお願いしたサイテック社には送金の遅れへの対応までお世話になった。

2014年度は30人余での東京会合が計画されているが、笹川平和財団を初めとする多くの方々を経理処理では素人同然の私たちを応援してくれたことへの感謝の気持ちを忘れずに進めていきたいと思う。

(JASTJ理事 佐々義子)

# 南海トラフ巨大地震にどう備えるか

河田恵昭・関西大学教授が熱弁

南海トラフ巨大地震が発生すると、激しい揺れと最大34メートルの大津波によって死者は東日本大震災を大きく上回る約32万人、全壊・焼失建物239万棟、避難者は950万人、経済的損害は220兆円に。こんな被害想定をまとめたのが、中央防災会議の「南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ」。その主査を務めた河田恵昭・関西大学社会安全学部教授が9月19日の例会で南海トラフ巨大地震の被害想定と対策について熱弁をふるった。

## 国難の危機の可能性を警告

河田教授は日本自然災害学会会長や情報災害学会会長を歴任するなど災害分野の第一人者で、文理融合型の防災・減災を呼びかける研究者としても知られる。東海・東南海・南海の3連動地震を含むマグニチュード(M)9級の南海トラフ巨大地震は約700市町村に災害救助法が発令されるスーパー広域災害となり、首都直下地震の発生と並んで、まさに一国の危機である「国難」が到来し、日本が衰退に向かう可能性があるという警告した。

例えば地震の影響を受ける都府県の入院患者62万人余りの搬送と治療継続が必要なのに、新たに入院が必要な負傷者が約15万人出る。一方で医薬品卸売業者の拠点の被災によって通常は大量出荷される医薬品が流通しなくなる。道路や鉄道も寸断され、ガソリンなど燃料供給にも大きな支障が生じる。こうした問題にどう対応するかが問われているという。

河田教授は「特効薬はない。ちょっとずつ対策を積み重ねていく以外ない。5年ではできず、100年計画になるかもしれない」と指摘した。防災対策実施



南海トラフ巨大地震の発生で東西から大津波が襲う和歌山県串本町の中心部 (撮影 横山裕道)

の効果については、住宅耐震化率を現在の79%から95%に高めれば全壊建物棟数は6割減になることを挙げ、犠牲者数の減少には①津波避難ビルのさらなる指定、②避難場所・避難施設の整備促進、③施設配置の見直し、④高台移転、などを推奨した。



「大変な災害になる」と語る河田教授 (撮影 横山裕道)

防災体制の基本は、自分の命は自分で守る自助、まちの安全はみんなで守る共助、地域のインフラ整備を進める公助であることも強調した。ところが2013年9月の台風18号で避難指示・勧告が出た京都市の約30万人のうち避難したのは1%に過ぎなかったことを挙げ、「自然の摂理の中で生きているのに、こんなことでいいのか」と声を張り上げた。

話題は東日本大震災など多岐にわたり、次のような発言も。「東日本大震災では車いすがあったら、多くの命が助かっていた。お年寄りはその間に動けない」「東北で被災した3県の知事は十分なリーダーシップを発揮していない。だから復興があまり進まない」「腕時計で揺れの長さを計れば、地震の規模はほぼ分かる。1分でM8、3分でM9と思えばいい」。

## ジャーナリストへの苦言も

質疑応答では、ジャーナリストの在り方も取り上げられた。河田教授は「『先生、液状化って何ですか』と質問されたり、『地図がほしい』という要望があったりする。新聞記者はもっと勉強し、地図ぐらい前もって用意しておくべきだ」「よく理解した記者は分かりやすい記事を書く。たくさんのことを伝えようとするのは駄目」などと答えていた。

その日のうちに大阪に帰る予定のため、例会はいつもよりずっと早い午後5時過ぎに開始。会場もいつもと違う四谷の貸し会議室だった。それでも約20人の会員が河田教授の怪気炎に熱心に耳を傾けた。

(JASTJ理事 横山裕道)

## 地球温暖化の現状をどう理解するべきか？

国立環境研究所の江守正多氏に聞く

10月31日の例会は国立環境研究所気候変動リスク評価室長の江守正多氏を招き、地球温暖化の最新理解について話を聞いた。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の第五次報告書が発表された直後ということもあり、参加者は熱心に話を聞いていた。講演後の質疑応答でも温暖化モデルの信頼性や政策との関わりについて多くの質疑が交わされた。

### 人間活動との関連は極めて高い

講演の序盤に江守さんは「20世紀半ば以降の世界の気温上昇は人為起源が要因である可能性が極めて高い」とIPCC報告書の結論を述べた。そう言えるのは「人間が温室効果ガス等を出していなかったと仮定して温度変化のシミュレーションを行うと、過去100年に観測された世界気温上昇が説明できないからだ」と指摘した。

しかし最近の15年、気温上昇が鈍っていることを理由に温暖化モデルを疑う人が多くいるのも事実。それに対して江守さんは「地球の温度は外部的要因が無くても上がったたり下がったりする。今は内部的な要因で気温が下がろうとしているため、外部的要因が打ち消されている」と解説。「例えば、熱が海の深い所に送られているために表層の温度があがっているように見えないことが考えられる。他にもいくつかの要因が考えられるが、気候変動の科学で説明できないことではない」と述べた。

江守さんは二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）の排出量と気温上昇の関係について「これから何も対策をしないで温室効果ガスを出し続けた場合、現在より最大で48度気温が上昇する可能性がある」と指摘した。また前回の報告書の結果を引用して「90年代からの気温上昇が2度を超えると地球規模で悪い影響が起こ

る」と述べたうえで、「世界の気温上昇はCO<sub>2</sub>の累積排出量に比例する。現在の排出量が続けば約30年で気温上昇を2度に抑えるための総量を超過してしまう」と訴えた。気温上昇を抑えるために何らかの対策を起こさなければいけないことは確実なようだ。

講演後の約一時間は質疑応答にあてられた。「温暖化モデルではどのようなことが批判されているのか」という質問に対して、江守さんは「気候変動に疑いを持つ意見にはピンからキリまである。近年の気温上昇の休止、太陽活動の効果については私も考えなければいけないと感じている。しかし、どんなに精密な議論をしても、人為的な原因による気候変動を疑っている人たちはその結論を信じないだろう」と述べた。

また、講演の中で江守さんが触れた「熱が海の中に潜り込んでいる」というモデルについては質問が集中した。「熱が海底に入り込むモデルは厳しいのではないか」という質問に対し、江守さんは「まだはっきりした説はない」と率直に答えた。そのうえで「地球システム全体の持つエネルギーは増えている。地表で温度上昇が観測されていないなら、海以外に行くところが考えられない」と答えた。

### 人類の持続可能性を考える時期に

最後に、政策立案者との認識共有について聞かれた江守さんは「非常に本質的な質問だ」と述べ、「専門家は温暖化の影響は近い未来に影響を及ぼすという。しかし私は、自分の世代だけのことを考えるのならそれほど被害を受けると思えないし、対策を取ろうとは思わない」と答えた。そのうえで「気候変動について対策を取れるかどうかは、将来世代のことを本気で心配できるかどうかにかかっている。そう考えるべきだと環境省には訴えている」と、人類の持続可能性について考える時期に来ていることを強調した。

講演全体を通じて江守さんは自分の理解を押し付けるのではなく、温暖化モデルについてもどのような間違いの可能性があるのかについて丁寧に説明してくれた。不確かさのある科学をどう伝えるかについて学ぶことの多い講演だった。

（JASTJ会員 鈴木友）



温暖化モデルの間違いの可能性も含めて丁寧に説明する江守さん  
（撮影 西野博喜）

## 戦後日本の科学ジャーナリズム史に迫る

科学ジャーナリストという存在は、日本ではどれほど広く認知されてきたのだろうか。私が現在所属する早稲田大学大学院政治学研究科では、2005年から「科学技術ジャーナリスト養成プログラム」を設けたが、それが先駆的な試みとして評価されたのは、科学ジャーナリストが日本社会の中でまだ十分に根付いていない面があるからであろう。では、戦後60年以上の間、日本の科学ジャーナリズムとはどのように展開してきたのだろうか。

### 科学ジャーナリストにインタビュー

私はもともと明治期の新聞などを対象として、ジャーナリズムとメディアの歴史研究を実証的に進めてきた者だが、2011年の東日本大震災の報道に接したこともあって、そのような素朴な疑問を抱いた。各新聞社の社史や日本科学技術ジャーナリスト会議編『科学ジャーナリズムの世界』といった本もあるが、科学ジャーナリスト自身が自らの仕事の実情を語ったものは多くない。ちょうど三年前から、戦後日本のジャーナリズム及びメディアの歴史を明らかにするための聞き取り調査を学部学生と共に行ってきたので、2013年度は、科学ジャーナリストを対象に聞き取り調査を行うことにした。その実施のため、「戦後日本の科学ジャーナリズムの経験知」という研究課題名で、早大内の研究費を得た。

調査対象者の選定にあたっては、元毎日新聞科学環境部部長として活躍し、現在早稲田大学大学院政治学研究科ジャーナリズムコースの教員である瀬川至朗氏と、日本科学技術ジャーナリスト会議元会長の武部俊一氏にご協力いただいた。聞き取り調査をしたのは、戦後日本の科学ジャーナリズムで活躍してきた60代半ば以上の25人（表参照）。いずれも科学ジャーナリストとして40年以上のキャリアを持

ち、戦後日本の科学報道、公害・環境・医療などの報道で重要な実績を積み重ねた名うての記者ばかりである。

### 2014年3月には報告書を

インタビュー調査は次の二段階で進めた。第一段階は2013年4月から9月の間、インタビュー調査の準備として、戦後の科学技術ジャーナリズムに関する資料を収集し、必要な背景知識を蓄積、インタビュー調査にあたる学生とともに科学ジャーナリズムとその歴史に関する勉強会を行い指導した。これには早大政治学研究科ジャーナリズムコースの教員である瀬川至朗、田中幹人、中村理の各氏が講師として協力した。第二段階は2013年10月からで、インタビュー調査の実施と記録原稿の作成である。インタビューは原則として一回二時間程度。教員および学生二人組で、半構造化インタビューの形態で行った。現在、その内容を文字に起こし、記録として編纂している最中である。その成果は報告書として印刷製本し、2014年3月に刊行する予定である。また、ご協力

者の了解が得られれば、インタビューの要旨を、ネットの土屋ゼミ・ジャーナルに掲載させて頂きたいと考えている。（JASTJ会員、早稲田大学政治経済学術院教授 土屋礼子）



科学ジャーナリストへのインタビュー調査の様子。毎回、学生二人が組になって実施した  
（提供 土屋礼子）

### 調査協力をお願いした25人

武部俊一、馬場錬成、尾崎正直、内山幸男、高津真也、岡島成行、横山裕道、高柳雄一、林勝彦、浅井恒雄、高田和男、田村和子、堤佳辰、田辺功、餌取章男、中村政雄、飯島裕一、大熊由紀子、牧野賢治、原剛、小出五郎、竹内謙、中村雅美、塚田博康、石弘之（敬称略、順不同）

## 塾生に聞く 科学報道の失敗体験に何を学びたいか

第12回科学ジャーナリスト塾が10月から来年3月まで、東京・白山の日本科学技術ジャーナリスト会議事務局のある富山ビルで10回にわたって開かれています。「科学報道の失敗体験に学ぶ」をテーマに科学ジャーナリストが自らの体験を語り、そこから何を学ぶかを共に考えようという狙いです。参加してくれた塾生のみなさんに期待、抱負、感想を聞きました。(JASTJ理事 小出五郎)

### アウトリーチ活動支援に役立てたい

笹川由紀さん

私が科学を伝えることを仕事にしたいと思ったきっかけは、前職でBSE検査や遺伝子組み換え実験の教材などに関わった際、科学と社会との関係のアンバランスさをどうにかできないものか、と感じたことでした。

現在は遺伝子組み換え作物等のコミュニケーションを中心に、研究所見学者や研究者のアウトリーチ活動の支援をしています。私たち広報部門にとっていわば“お客様”のメディアのことを良く知っていい関係を作りたい、そして塾生と意見交換してみたいと思います。(農業生物資源研究所広報室)

### 原発事故きっかけに今後の指針を

友久保彦さん

現在はアフリカの都市を研究していますが、大学では実験核物理や放射線物理を勉強し、10年間電機メーカーの原発技術者でした。原発事故後、科学と科学者に対する信頼が揺らぐのを目のあたりにし、サイエンス・コミュニケーションに関わりたいと受講しました。

塾では「なぜ・どのように・何を」失敗したかといった分析から、科学技術に携わる者にとって今後の指針になる議論ができたと思っています。

(一橋大学大学院社会学研究科博士課程)



科学報道の失敗体験について聞き入る塾生たち

(撮影 西野博喜)

### 科学情報どう発信すべきか

平塚裕子さん

原発の再稼働／廃止論議、放射能被害など社会問題を解決していくうえで、科学的な根拠とデータをもとにした議論の必要性を常々感じてきました。議論の基礎になる科学情報をどう発信すればよいのか、勉強したいと考えました。塾のテーマ「失敗から学んだこと」から、大規模に情報を発信する場合の問題をはじめ、これまで知らなかった視点を学ぶことができ、刺激的な時間を過ごしています。

(フリーランス、元東京図書編集部)

### 科学と社会の関係を知りたい

小笠原健太さん

東北大震災や英国留学を通して、科学と社会の関係に関心を持ち、塾に参加しました。私自身、科学への関心が低く、距離を置いていました。しかし、科学技術にくらいために世の中で起きている事が分からないのは困ります。それだけに、科学になじみの無い人に、科学をどのように伝えるのかに関心があります。塾を通して、科学と社会の関係について理解を深められたらと思います。(ロンドン大学、2013年秋卒業予定)

### 単純な二項対立をどう克服

飯田貴也さん

「科学技術なしでは解けないが、科学技術だけでも解けない」問題が山積しており、このような状況下での科学者のふるまいが問われています。一方に専門家である科学者、もう一方に素人である市民が位置するという、単純な二項対立の構図を描くことはできないでしょう。この塾を通じて、とりわけポスト3・11において、科学技術と社会、また科学者と一般市民がどのように向きあうかを考えていきたいと思っています。

(早稲田大学生、日本サイエンス・コミュニケーション協会ほか)

### 科学伝えるライターを目指して

都丸亜希子さん

「専門家と非専門家をつなぐ仕事にかかわりたい」と思ってきました。今はサイエンス・コミュニケーターの友人たちを手伝っています。将来は、わかりやすい言葉で科学の現状や技術の進歩を伝えるライターを目指しています。

さまざまな制限がある中で、ジャーナリストが、何を目的に、どのような視点から、どういう立場の人に向けて、どんな情報を、いかに伝えたのか、受け手の反応はどうであり、それにどう反応したのか等に興味があります。ジャーナリストの経験を生の言葉で聞けることを楽しみにしています。

(パートタイム、福島大学)

## JASTJ設立20周年記念事業

来年の7月でJASTJは設立20周年を迎えます。10周年には、JASTJは記念出版として理事・会員ら40人が執筆して化学同人から「科学ジャーナリズムの世界」を出版しました。記念イベントとしては、内幸町のプレスセンターでシンポジウムを開きました。シンポジウム第一部は、サクソ奏者でありミジンコ研究でも有名な坂田明さんが講演とサクソの演奏。第二部は評論家の立花隆さんと天文学者の池内了さんらの話。白川英樹、野依良治、田中耕一の3人のノーベル受賞者にも参加していただきました。

では、20周年記念は何をするか。10年前に比べると資金的余裕がありません。また、アジアの科学ジャーナリストを養成するSjCOOPアジアが始まったばかりで、2015年にソウルで開かれる科学ジャーナリスト世界会議にJASTJが全面的に協力するための準備もあります。人手が足りそうにありません。このため、10年前に比べて少し控えめに記念事業を

進めたいと思っています。

科学ジャーナリスト、科学コミュニケーターになりたいと希望する若者が少しずつですが増えています。そんな若者の背中をそっと押す、科学ジャーナリズム入門書的な本を記念事業として出版したいと思っています。JASTJの理事や会員たちに、過去の自分の科学報道の失敗の経験を紹介しつつ、あるべき科学報道論をこの本で展開してもらいます。

また、来年7月ごろにはワインと軽食の音楽会「科学と音楽の夕べ」（仮題）を開きたいと思います。JASTJには意外にも音楽に造詣が深い人材が多く、このような企画ができました。ワインを楽しみながら、音楽と科学を語らおうという楽しい集いです。当然ながら、会員は参加無料です。

そのほかに、過去のすべてのJASTJ会報を収録したCDも作成します。完成したら、みなさんにお知らせしますので、希望の方は事務局までご連絡ください。無料です。（JASTJ事務局長 引野肇）

### WEB編集長から

ここ数年で、JASTJが行う事業も増加し、会員の皆様に伝えるべき情報も増え続けています。また、情報の発信方法も多様化し、フェイスブックやツイッターが積極的に活用されていることも、ご存知のとおりです。

JASTJのWebページの基本設計は、8年前につくられたものです。Webページのデザインにも流行があるので、いまではとくに時代遅れになってしまった技術も使われているのが、JASTJのページです。

そこで、Webページの設計を更新し、新年から公開することになりました。

#### ■ 会員からの情報発信をもっと柔軟に

Webページは、基本的にJASTJから一方的に発信される情報のウェイトが高くなりますが、会員の皆様もぜひ参加していただきたいと考えました。その一例として、個人会員の皆様が自ら制作しているWebページやブログなどを「バナー」で紹介するページを新設します。テキストのリンクではなく、目立つ工夫をすることで、皆様にとって「効果的な広報活動」に結びつけます。

現在のWebページは、事務局からのお知らせや科学ジャーナリスト賞の情報などはよく閲覧されているものの、各会員に個別に配付したパスワード付きのエリアに

は、ほとんどアクセスされていないようです。そのため、新しいWebページの設計では、パスワードでアクセスするページの情報量を大幅に減らし、事務局の省力化を図ります。

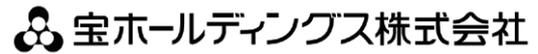
#### ■ メールシステムについて

会員向けにメールを送るhello@jastj.jpを管轄するサーバーが更新され、より強固なセキュリティーポリシーのもとで運用されています。しかし、セキュリティー（特に迷惑メール対策）を強化すれば、本来届くべきメールが届かないという事例がありえます。もし、事務局にメールを送ったにもかかわらず返信がない場合は調査しますので、system.jastj@gmail.comまでお知らせください。

また、Google groupsを使ったメーリングリストから情報が漏れている、という新聞報道があったため、新しく作成したJASTJ会員向けのメーリングリストシステムの検証を慎重に行いました。相当の時間がかかってしまいましたが、以前の告知の内容で、新年から運用を開始します。新しいシステムは、「全員のアドレスを加入し、解除を希望する人が申し出る」という運用になります。詳細は全会員にメールでお知らせいたしますので、ご確認ください。（Web編集長 藤田貢崇）

# JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2013年12月現在)



宝ホールディングス株式会社



味の素株式会社



株式会社東芝



鷗友学園女子中学高等学校



日本電信電話株式会社



花王株式会社



ノートルダム清心女子大学 情報理学研究所



独立行政法人 科学技術振興機構



株式会社日立製作所



株式会社構造計画研究所



三菱電機株式会社



サントリーホールディングス株式会社



ロート製薬株式会社



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会

賛助会員募集中

## お知らせ

### 「科学ジャーナリスト賞2014」の候補を募集

「科学ジャーナリスト賞（JASTJ賞）」の選考を始めています。今年も会員のみならずから同賞の候補作を募っています。また1次選考に携わっていただく「バーチャル書評委員」も募集しています。ふるって候補作の応募、書評委員への参加をお願いします。

科学ジャーナリスト賞は、科学技術に関する報道や出版、映像、科学館の特別テーマ展示などで優れた成果をあげた方を表彰します。原則として個人（グループの場合は代表者）を対象とし、ジャーナリストだけではなく質の高い啓蒙書を著した科学者や科学技術コミュニケーションなども対象にします。

同賞は2014年で9年目。2013年は4作品が選ばれ、そのうち、朝日新聞の連載記事「原発とメディア」（2011年10月から2012年の12月まで計306回）が「科学ジャーナリスト大賞」に選定されました。

◎ ◎ ◎

2014年の選考の対象は、2013年1月から2014年3月末までに公表された作品で、自薦・他薦は問いません。応募の締め切りは、選考作業の都合から、2014年2月末としますが、3月以降に発表されたものに限り3月末まで「飛び込み」で受け付けます。科学技術ジャーナリスト会議のウェブサイトにも募集要項や候補作推薦書があります。

選考は会員による1次選考と、白川英樹・筑波大名誉教授ら5人の有識者が中心となった2次選考の2段階方式です。

この1次選考に関わっていただく「バーチャル書評委員」を会員から募っています。上記のような書籍と新聞・雑誌記事の候補作について、書評委員の間で話し読みをして2次選考に値するかどうかを評価します。科学館などのテーマ展示も時間が許せば、足を運んで評価をいただければ幸いです。

参加を希望の方は事務局へメール（hello@jastj.jp）を送って下さい。たくさん本や新聞記事を読まなくて

はならないのではないかと心配に思われる方がいるかもしれませんが、あくまでボランティアベースです。過度なご負担をおかけするようにことがないように配慮いたします。

参考に、これまでに集まった候補作品（2013年12月4日現在）は以下の通りです。

書籍は、『再生医療の光と闇』（坂上博 講談社）／『原子カムの陰謀』（今西憲之 朝日新聞出版）／『メディアを読み解く力』（小島正美 エネルギーフォーラム）／『科学者が人間であること』（中村桂子 岩波書店）／『日米同盟と原発』（中日新聞社会部）——など13作品。映像は、「NHKスペシャル いのちの記録を未来へ～震災ビッグデータ」（日本放送協会）／「NHKスペシャル 病の起源第3集 うつ病～防衛本能がもたらす宿命」（日本放送協会）——など3作品。展示は「中谷宇吉郎の森羅万象帖展」（LIXILギャラリー 2013年9月2日～11月23日）。

（JASTJ賞担当理事 滝順一、事務局 中野薫）

## 会員のBOOKS

## 新刊紹介

### トリウム原子炉の道

リチャード・マーティン著、野島 佳子訳（朝日新聞出版・税込2100円・2013年10月）

私たちはウラン炉に見られるように、ある技術の採用を「科学的優位性が立証された結果」としか認識しないが、実はそうでもないようだ。本書は、かつてウラン炉と競合したもう一つの原子炉、トリウム炉を軸に、エネルギー技術の歴史と現況を伝えるものである。

本書を読むと、技術の勝ち残りを左右するのはむしろ政治や国際情勢との兼ね合い、資金といった問題であることに驚かされる。次世代エネルギーをめぐる目下の競争も、この現実を加味して注視する必要があるようだ。

（JASTJ会員 野島 佳子）



## 編集後記

▶定年間近に新聞社を辞め、ある国立大学法人に勤め始めたときに、つくづく感じたことがあった。民間企業なら予算の使い方はかなり現場に任されて自由なのに対し、規則でがんじがらめにされ経費節減の創意工夫はむしろマイナス評価になる。“官”の世界を法律で縛るのは国民の税金を使う以上、仕方ない面もあると思うが、官の世界には規則や法律が拡大解釈され社会を硬直化し萎縮させるメカニズムが組み込まれている。12月に成立した特定秘密保護法は国民にも広く網がかけられる。いくらでも拡大解釈が許されそうなこの法律がどれほど危険なものか、いま改めて感じている。（鞞）

## 編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**  
Japanese Association of Science  
& Technology Journalists (JASTJ)

〒112-0001 東京都文京区白山5-1-3 東京富山会館5F  
電話・FAX: 03-5689-7191 Email: hello@jastj.jp  
会長／小出重幸、事務局長／引野 肇  
編集長／高木鞞生 (tyuki7581@yahoo.co.jp)